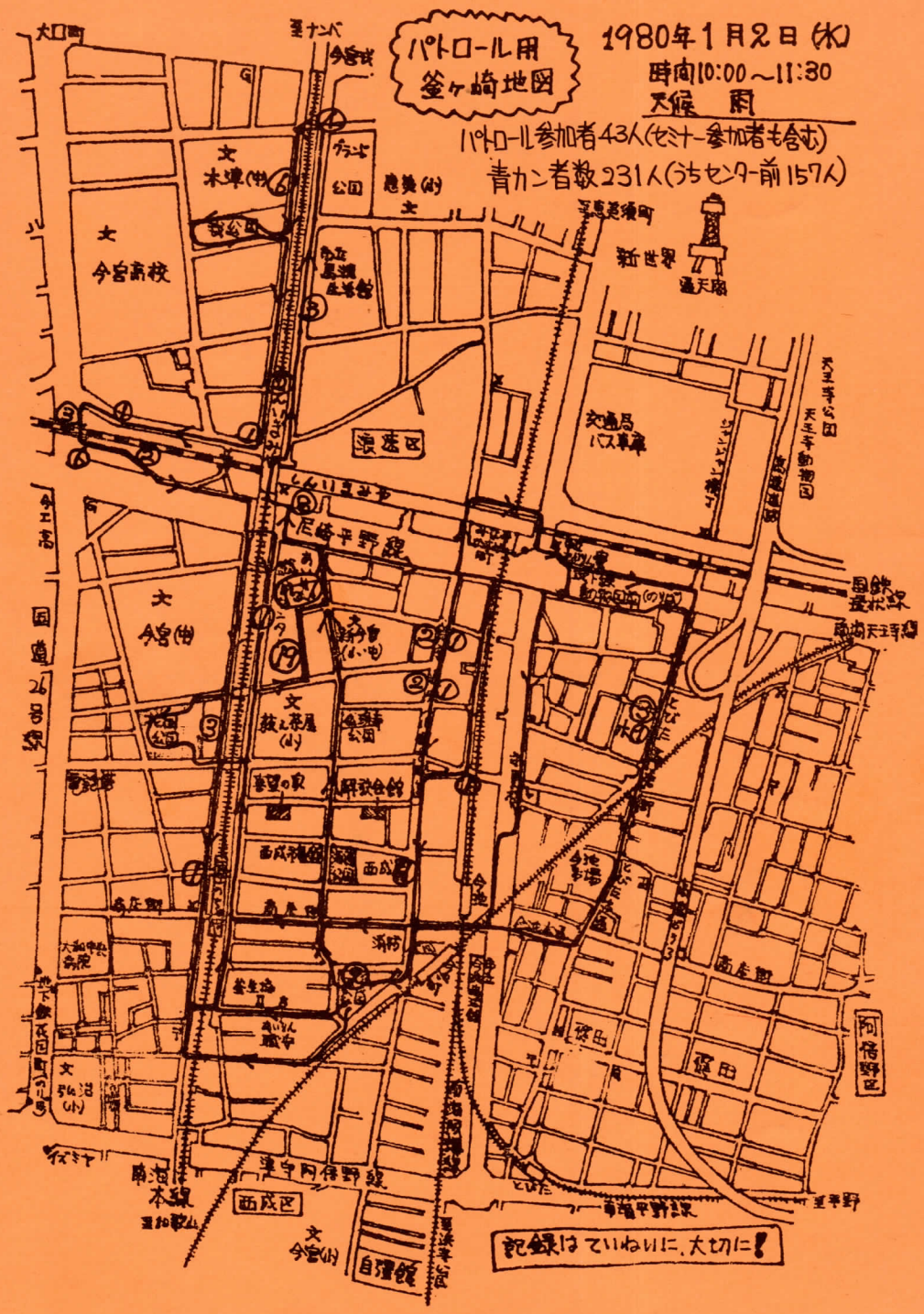
釜ヶ崎　1979年冬



キリスト教釜ケ崎越冬委員会

●一人の死者も出すな

●資本と国家権力による釜の冬地獄攻撃を打ち砕け

●釜ケ崎労働者の生きる権利を確立しよう。

病弱者、高齢者、「障害者」に仕事をよこせ！

冬期の特別就労事業を起こせ！

病気の仲間を入院させろ！

結核の仲間の完全治療を保障せよ！

ドヤ居住者にも生活保護を適用せよ！

越冬公園をかえせ！

●二万釜ケ崎労働者の団結で一人の死者も出すな。

●釜ケ崎差別と闘い全ゆる差別を許さらい労働者階級人民の団結を！

●米日帝国主義の戦争と政治反動を打ち砕き八〇年代を切り開こう。

―一九七九年第一〇回釜ケ崎越冬闘争スローガン―

釜ケ崎 1979年冬もくじ

巻頭言…… 1

入佐明美さんにインタビュー …… 10
●聞き手　重野信之

1979年度釜ケ崎越冬支援を終えて…… 2

釜ケ崎の病気
診察依頼券活動からみた釜ケ崎の病気 ……24
広崎病院事件 ……28
アンケートにみる入院患者の願い ……32
医療ニュース ……40

キリスト教釜ケ崎越冬委員会について … 44
1979年越冬支援呼びかけ 1.2…… 41
第5回越冬セミナー報告 ……18
青カン者統計グラフ ……36
炊き出し統計グラフ ……37

越冬に参加して ……14
E・ストローム・シスター岡風呂
詫摩　良　田中　豊
越冬パトロールから……22
S. ハインリッヒ・背振一而・前島宗甫

写真
●空からみた釜ケ崎 ……38
●釜ケ崎の夏まつり　（1979年8月）…39

釜ケ崎越冬支援日録 ……4

釜ケ崎の病気

今年の越冬は、責任者でありながら発病、入院ということで、みんなに迷惑をかけてしまった。

結核とは無関係と考えていたので、発病はショックであった。

院長の「金井さんも入院し、患者の体験をもったので、今後、病院訪問に役立つでしょう」という言葉を複雑な思いで聞いた。

入院をした、釜ケ崎の労働者が自己（事故）退院をする気持が良く理解出来た。結核は、社会の病いであるが、釜ケ崎はまさに「傷める巨象」である。

ただ、心がまえをとくことが、いかにむなしいかを教えられた。

第一は、患者に信頼される医療体制の確立が急務である。釜ケ崎の結核患者の88%は中途退院の経験者（医療センター調べ）であるという。患者にとって、医療体制への不信は、絶望そのものであり、「死に至る病」なのである。

第二は、社会復帰の問題だが、今日、結核はリハンプシンの出現によって不治の病ではない。しかし釜ケ崎の日雇労働者にとって結核は、それでもなお、「死に至る病」として存在しつづける社会的病根なのである。（金井）

一九七九年度釜ケ崎越冬支援を終えて

はじめに

「一人の死者も出すな」を合言葉に、十年目をむかえた越冬のたたかいは、こと数年来のパターン化した内容で今年も行なわれたが、西成労働福祉センター始って以来の好景気といわれた七九年度の釜ケ崎の情勢ともからんで、ひとつの大きなふしめであったと思う。私たちは、昨年度の総括をふまえて、医療問題に支援内容の力点をおき、初めて「釜ケ崎の病気」と題する活動テーマをもうけた。以下簡単に各項目をおってふり返ってみたいと思う。

1. 行政への働きかけ

12月14日に大阪市へ「要望書」を提出し、民生局と話し合いのひとときをもつ。今年は特に、地区の十人に一人が結核患者といわれる地域医療の問題を中心に、大阪市の釜ケ崎に対する抜本的対策について問いかけたが、例年どうり、何ら誠意ある回答は得られなかった。重大な問題であるがゆえに、うかつには答えようとはせず、口を開かない民生局の対応は、また、市民の釜ケ崎に対する差別と偏見によって支えられているものであると思う。しかし、同じ日に訪問した福祉事務所、消防署、保健所等の直接の窓口では、日雇労働者と日常的にかかわる市職員の生の声を聞くことが出来た。今後は、こうした末端とのかかわりを持ち続ける中で、わずかずつながらも行政をつき動かしてゆく必要を痛感した。

2. 医療活動

「一人の結核患者の完治・自立を」目標に始った以下の活動は、越冬とともに終るものではなく、年間を通して続けられる。「越冬」は季節の問題でないと言われてきたが、今年の越冬支援の中でこうした長期的な活動方針が出されたのは明るい材料であった。

イ、入佐さんの活動

越冬の中盤戦ともいえる1月16日から、結核ケースワーカーとしての活動を始めた入佐明美さんは、困難の山積する釜ケ崎の地で、持前の性格からすんなりと労働者の中に溶け込み、相談ごとを聞き、多くの人に診察依頼券を発行し、中には入院できた人もいた。行政の関係各所や各病院ともつながりを持つ中で、さらに充実した働きとなるように囲りからも固めていかなければならないと、私たちは考えている。さらに、資金カンパも目標額を上回り、年間を通して

彼女の活動が支えられると一同感謝している。

ロ、医療相談

月・水・金曜日の午前九時から十一時まで、喜望の家で医療相談を開いた。しかし、宣伝不足もあってかこの時間帯に来る人は少なく、かえって時間外の相談の方が多かった。相談できる場が必要なことは言うまでもないことだが、この曜日、この時間に来なさいとの姿勢が問われたと反省している。たとえば、炊き出しに出かけていく、あるいは朝の炊き出し時における診察依頼券発行を分担する中で、医療相談に応ずるということがあってもよかったのではないだろうか。キリスト教越冬委員会のこの医療相談は二月末で終ったが、その後も協友会団体へは、相談に来る人がたえない。

ハ、病院訪問

越冬を通して入院した数多くの病院の中から、結核病院六ケ所、一般病院二ケ所を重点的に選び、過去訪問を続けてきた八ケ所の病院と合わせて、十六ケ所を各病院ごと担当者を決めて、三月に入り精力的に訪問した。これは、四月からの病院訪問の予備調査的な意味も兼ねて行なわれた。アンケート調査等で患者の声を聞く中から、やはり、退院後の生活不安を訴える人が多いのに気付く。そのため、喜望の家に住民登録を移す人も多くいた。今後、これらの人が退院後、喜望の家をたよって来た場合、再発を防ぎ、自立に向けて、どのように私たちがかかわれるかはこれからの課題である。しかし、第一回目の患者交流会をとりあえず開くことができたのは喜びである。また、これら多くの病院を、私たちの力だけでは十分カバーできないので、ボランティア養成と幅広い学習会の開催を現在検討中である。

3. 夜間医療パトロール

毎週月・水・金曜日を担当。昨年度の青カン者数の最高は1月1日の三五四人であったが、今年は12月28日の三二六人であった。一日平均も今年は十三人少なくなり喜びであるが、青カン者数は、炊き出しに並ぶ人とともに、釜ケ崎の就労状況を如実に反映する。年末年始に仕事がばったり途絶える限り、青カン者数の極端な減少は望めないだろう。さらに、今年のパトロールではなるべく投薬をひかえ、病院に行くことをすすめた。しかし、私たちの救急箱だけを当てにする人も相変らずいて、労働者の参加が少ないこととも相まって、与える側と与えられる側という関係性の打破が、今後の大きな課題となる。一方、参加された支援の方々の輪が今年も広がったことは成果の一つである。

むすび

総括集会を4月13日、ふるさとの家で行ない、越冬後の課題について話し合う。そこで「労働者の家」建設という大きな展望が出されたが、前途は多難である。越冬委員会は四月で一応解散し、続いて先の医療活動を話し合うキリスト教釜ケ崎医療連絡会が新たに発足した。最後に、物心両面から様々の援助をいただいた方に深く感謝し、今後とも引き続き協力をお願いいたします。

越冬日録 1979～1980

この日録は，釜ケ崎の全体像ではない。1979年冬から1980年春にかけて，「越冬闘争」の中でわたしたちの目にうつった釜ケ崎である。一面的という指摘もあろう。しかし，これは断じてフィクション（虚構）ではない。やはり<現実>なのである。

「釜ケ崎の病気」というごく限られたテーマからもこんな釜ケ崎像が浮びあがって来る。ここからもまた「人間でありたい」というたたかいの叫びを聞いていただきたい。

三角公園でのもちつき大会　　中川繁夫氏写す

一九七九年

9月2日　協友会九月の例会で、一九七九年度釜ケ崎越冬支援について話し合う。協友会から五人の越冬委員を選出し、KUIM（関西キリスト教都市産業問題協議会）へは三人が越冬委員として参加されるように正式に要請。

10月6日　一九七九年度キリスト教釜ケ崎越冬委員会が発足する。代表・会計を選出し、十一月から翌年四月まで専従者を置くこと、また、昨年度の総括をふまえて、今年度越冬支援のテーマを「釜ケ崎の病気」とし、結核問題を中心に、診察依頼活動、医療相談、入退院の手続き援助、病院訪問等といった昼間の活動に力をそそぐことに決定する。また、活動の拠点は日本福音ルーテル教会・喜望の家とする。

24日　越冬委員会で、実りある夜間医療パトロールとはどのようなものかについて意見が交される。活動に必要な予算案を決定し、そのための六百万円カンパ要請ビラの文案を検討。今年度越冬支援目標を次のように決定。
一、釜ケ崎越冬の抜本的解決を求めて、大阪市関係各局へ要求活動をする。
二、結核ケースワーカーの年間を通じた活動を支える。
三、医療相談、病院訪問等の医療活動に力をそそぐ。
四、死者を出さないための夜間医療パトロールを行なう。
五、炊き出しのために百万円のカンパをする。

11月5日　越冬支援カンパ要請ビラ七千枚の印刷が仕上り、発送準備にとりかかる。

6日　行政（大阪市）への要求活動を検討し、まず西成区選出の市会議員（各党）に会って、釜ケ崎越冬の実状を訴えること。そして、地区の民生委員に協力要請、保健所、福祉事務所訪問などを決定する。毎土曜日夜越冬委員会。

7日　大阪市長選挙の大島靖、新宮良正両候補に公開質問状。質問内容は次のとおり。
一、一日平均二百人余の青カン（野宿）者をなくす具体策は？
二、釜ケ崎の十人に一人が結核患者といわれる地区の結核を解消する具体策は？
三、大阪市社会福祉審議会が答申した「愛隣地区（釜ケ崎）福祉対策の今後の進め方に関する答申」をどう受け止めるのか？

11日　協友会例会で、先の答申を出した市社会福祉審議会委員大薮寿一氏を招き、答申委員としての見解を聞き、地元住民の意見を述べる。

13日　西日本のキリスト教教会、学校、団体に越

冬支援カンパ要請ビラを第一次分として、約千八百通発送する。同日、大島靖市長選候補より公開質問状の返答が届く。「現職であるから質問には答えられない。よって私の政策網領をもって返事にかえさせてもらう」とのこと。続いて十六日には、新宮良正候補より各質問項目について考えを述べた返答が届いたが、十八日の選挙では大島靖氏が大阪市長に当選した。

17日　釜ケ崎日雇労働組合委員長稲垣浩氏を委員会に招き、今年度の越冬について話し合う。

20日　越冬セミナーについて話し合う。テーマは「釜ケ崎の医療問題」、定員十名。内容では活動実習と結核専門医による労働者への公開講演会に重点をおくことに決定する。

21日　未明、地区内のアパート天満荘全焼。付近の簡易宿泊所も半焼。幸い死傷者なし。約百人が寒空に放り出される。翌日、越冬委員会毛布・防寒衣類の差し入れ。

22日　越冬支援カンパ要請ビラに越冬セミナー案内文を同封して、約千四百通発送する。発送総数約三千二百五十通。

28日・29日　第十回釜ケ崎越冬闘争実行委員会結成。これは釜ケ崎日雇労働組合が中心に各団体、個人が参加。今年は、高齢者、病人、障害者等の組織化をめざし、生活のレベルまで運動の輪を広げ、きめ細かな闘いを組み上げていこうと話し合われ、新たに文化体育班が作られ、子どもを対象にした活動を行なうことが出された。

越冬実の今年の越冬闘争スローガン

一、一人の死者も出すな。

一、資本と国家権力による釜の冬地獄攻撃を打ち砕け。

一、釜ケ崎労働者の生きる権利を確立しよう。

○病弱者、高齢者、障害者に仕事よこせ。

○冬期の特別就労事業を起こせ。

○結核の仲間の完全治療を保障せよ。

○病気の仲間を入院させろ。

○ドヤ居住者にも生活保護を適用せよ。

○越冬公園をかえせ。

越冬実の闘争本部を釜日労の中におく。

パトロールは夜十時。炊き出しは朝九時、昼一時、夜七時の三回。医療券発行は朝九時。

越冬闘争期間は十二月二十五日から翌年の二月末日までとする。

12月1日・2日　白手帳を持っている釜ケ崎日雇労働者に年末一時金八千百円が支給される。越冬実、労働者に越冬カンパを呼びかけ、約八十万円集める。

6日～10日　越冬委員会のメンバー、西成区選出の市会議員五名を訪問し、釜ケ崎越冬の実状を訴えるが、議員を動かすには至らず。

8日　越冬委員会では、結核患者の流れ図にそって、問題の所在を検討。
活動内容を決める。
一、医療相談　月・水・金曜日の午前九時から十一時。診察依頼券発行、入院手続き等。
二、パトロール　月・水・金曜日の夜十時から。越冬実と記録も分担して責任をもつ。
三、病院訪問　他の曜日に随時組んでいく。

11日　越冬セミナー参加者の選考を行う。

14日　越冬委員会の有志数名が、市の民生局生活第一係長栗栖氏と会い、要望書を手渡すが、話し合いでは何ら誠意ある返答を得られず、一同大いに不満のまま帰る。
要望書の内容は次のとうり。
一、真に困っている人が入れるような無料宿泊所の期間を延長してほしい。
一、地区の結核の根本的解決と入院先を確保をしてほしい。
一、市に釜ケ崎特別対策室を設置し、恒常的抜本的解決を考えてほしい。
一同、その足で西成福祉事務所、西成消防署（救急）、市立更生相談所、西成保健所分室（結核）をたずね、各担当者と話し合う。
同日夜、越冬実主催の「越冬闘争支援連帯集会」が部落解放センターで行なわれ、第四回越冬の記録映画上映後、基調報告等がなされた。約百五十名参加。

15日　越冬委員会、医療相談、パトロールの各曜日ごとの担当責任者を決める。

16日　協友会クリスマス。前半は越冬全体集会。越冬支援協力の呼びかけがなされる。

20日　西成保健所・大阪市環境保健局と「釜ケ崎の結核」について越冬実、被爆者の会、結核患者の会、越冬委員会が話し合う。
続々と集まる毛布、布団、衣類カンパの整理がボランティアによって行なわれる。

21日　阪奈病院中村事務局長と、越冬実、釜ケ崎原爆被爆者の会、越冬委員会が結核患者の入院を受け入れについてよく話し合う。

24日　キリスト教釜ケ崎越冬委員会、支援活動を始める。医療相談、まだ知れわたっていないためか、相談者なし。越冬実は夕刻から三角公園で総決起集会を開く。今夜のパトロールは下見の意味もかねて、越冬実と合同で行なう。夜十時、パトロール出発。
「パトロール初日、北、東、西の三グループで廻り、一応青カン者の状況を確認してお

くにとどめた。今年は仕事が出ているため、青カンが比較的少ないとのこと。戎公園で衰弱のSさんに救急車を呼ぶ」青カン者九十五名。（「　」はパトロール日誌からの引用）

25日　越冬実、越冬闘争を始める。「日刊えっとう」発行。夕方、喜望の家からカンパの毛布、布団百数十組を大阪社会医療センター前へ運ぶ。一日三食の炊き出しが始まる。

29日　越冬委員会で、支援の看護婦さんから救急薬の使用方法を学ぶ。鎮痛薬はなるべく使わない方針を立てる。

30日　大阪市臨時無料宿泊所の受付が市立更生相談所で始まる。千名を受け入れ予定とのこと。

一九八〇年

1月1日　越冬セミナー始まる。（十八頁以下参照）

2日　セミナー参加者ともども四十三名の大勢でパトロールする。「セミナー参加者の感想から――・もっと青カン者は多いと思っていた。・もうちょっとショッキングなことを期待していた。あれが異常だと思わなければならないと方向づけても、これが普通だと思う自分の問題をどうすればいいのか？」当日の青カン者数二百三十一名。未明、三角公園で一人の労働者が死んでいった。

3日　越冬実による「もちつき大会」が三角公園で行なわれる。一月一日から三日までの医療券発行総数百九十九。うち施設入所百六十六名、入院二十七名。何と病人の多いことか。

4日　越冬実、大阪市への抗議行動の後、南港の臨時宿泊所へも期間延長等を要求に行く。「市役所、南港へ抗議に行ったが、話す必要はないとの返事、管理する側の論理でしかないことを見せつけられた。」

5日　越冬委員会、二月十日に越冬支援中間報告集会を開くことに決定。

7日　山谷で働くマザー・テレサのグループ二人が今日から四日間越冬支援に参加。

14日　今までに発行した医療券三百十枚を整理する。相変らず結核患者が多い。

15日　「今日は非常に寒かった。昨年に比べて青カン者が少ないのが何よりであるが、明け方の冷え込みが気になる。三角公園にいる子供連れの障害者のオバサン、今後どう関っていくべきか」青カン者数百五十三名。

17日　入佐明美さん、姫路より大阪へ引っ越す。翌日より、結核ケースワークを始める。

19日　阪奈病院で、釜ケ崎結核患者の会が中心になって患者集会を開き、待遇改善を要求。中間報告集会を大韓西成教会で開くことに決定。集会内容は集会運営委員が検討。

23日　越冬実主催の第十回越冬闘争中間報告集会西成市民館で開かれる。約六十名参加。

31日　近隣の各教会へ中間報告集会の案内のため訪問。また、集会案内ビラ約五百通を発送。

2月2日　病院訪問の目的、方法について話し合い、組織化のため、病院訪問世話人会をもうける。

4日　病院訪問用の図書約一千冊の整理、および一月末までの医療券の整理を始める。

10日　中間報告集会、大韓西成教会で開く。約七十名が参加。多くの人が意見を述べたが、集会後の反省では、運営方法のまずさ等が指摘された。

13日　中間報告（越冬支援要請ビラ）を約三千二百通発送。

16日　越冬委員会で三月以降の活動について話し合う。特に、結核病院六、一般病院二、以前から訪問を続けている病院六の訪問と、各病院ごとに担当者をおくことを決める。個人との関わりを大切にしながら、「一人の結核患者の完治・自立を」目標にしていく。

23日　拡大越冬委員会を開き、三月からパトロール等の活動をどうするかについて話し合う。夜のパトロールなら参加できるがとの声もある中で、越冬委員会としては二月末でパトロール等の活動を終り、三月から病院訪問に力をそそぐことに決定。

29日　第十回越冬闘争終結集会が西成市民館で開かれる。越冬実、「明日からはセンター前の布団もない。炊き出しも夜一回だけとなるから、炊き出し等で食いつなごうとは考えてくれるな。病気の仲間は入院のことを考えて、相談に来てくれ」と訴える。

3月1日　病院訪問の時に、入院患者の実態調査を行なうことを計画する。

9日　広崎病院の入院結核患者七名が待遇改善を要求して、集団退院する。（詳細については二十八頁以下を参照）

23日～31日　第二回ＳＣＭ現場研修が、参加者十六名で開かれ、日雇労働体験、施設実習、そして夜はミーティングと活発に行なわれた。

4月13日　越冬総括集会が、ふるさとの家で開催。午後四時から六時すぎまで開かれた。重野牧師の司会で進められ、（一）専従者（福田佳昭氏）の総括報告、（二）病院訪問についての問題提起　（三）「労働者の家」建設についての提案がなされ討論にうつった。とくに「労働者の家」をめぐっては、その必要性と建設運動に討論が集中した。越冬報告書についての報告ののち、ハインリッヒ神父の司式で礼拝がもたれて、終了した。

入佐明美さんにインタビュー

●聞き手
重野信之

過重な肉体労働。片寄った食生活。それにアルコールが加わって、日雇い労働者の肉体をむしばんでいく。釜ケ崎労働者の十人に一人は「結核患者」だといわれるが、医療を受けられるのはほんの一握りに過ぎない。たとえ医療を受けても、完治しないまゝ労働につく人や中途で病院を出てしまう人も多い。

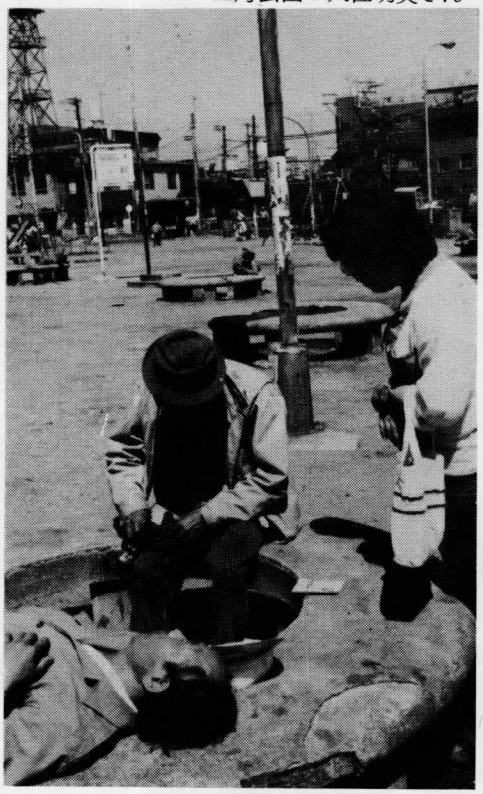
「Aさん、調子はどう?」

ほとんど男性ばかりの釜ケ崎の中で、一人のうら若き女性が、病気で青カン（野宿）している労働者たちに声をかけて回っている。今年一月十六日から医療ケースワーカーとして、釜ケ崎で働いている入佐明美さんがその人である。

国鉄環状線・新今宮駅西に降りると、すぐ目の前に十六階建てのマンモスビルがそびえ立っている。その建物の五階と六階に、釜ケ崎医療を引き受けている「大阪社会医療センター」（本田良寛院長）がある。入佐さんは、目下、午前中はこの医療センターで働き、午後からは公園や街頭に集まる労働者たちの中に積極的に入って行き、話しかけている。一人でも多くの患者を発見し、完治するのが入佐さんの使命だ。

入佐さんが活動をはじめた当初、「なんでこんな所へ来て、ワシらみたいな者の世話をするのや。そんなことより、早よう、結婚でもせー」と言っていた労働者たちが、だんだん関係が深まるにつれ、入佐さんに自分の身上話を打ち明けたり、もう一回治療を受けて立ち上がろうとする人たちが増えて来ている。入佐さんのような活動は、釜ケ崎では初めてなので、今のところその評価はできないが、入佐さんに活動の状況や感想を聞いてみた。たった数ヵ月ではあるが、どうやら、入佐明美さんは釜ケ崎医療の大切なポイントをつかまえたようだ。

三角公園の入佐明美さん



労働者との出合い

――まず、入佐明美さんが釜ケ崎へ来られた動機あたりからお話を聞かせてください。

入佐　わたしは、それまで「ネパールへ行きたい」と思い、ネパールで働いていた岩村昇先生からも、「あなたは、絶対に、ネパールへ行く人だから」といわれていました。ところが、ある日、その岩村先生から電報で呼び出され、はじめて小柳先生と会いました。そのとき、岩村先生は、釜ケ崎の結核の実情に心を痛めておられ、「外国にもネパールがあるが、日本にもネパールがある。ネパールへ行く前に釜ケ崎を知っていたら、おそらくわたしはネパールへ行かなかっただろう」と言われ、わたしに、結核のケースワーカーとして釜ケ崎で頑張ってくれないか、と話されました。釜ケ崎で酒におぼれ、誰からも必要とされないで、「もう、どうなってもいい、死んでもいい」という人たちが、もし、あのケースワーカーのことを思い出し、「やはり、生きていかんとあかん」と思う人が一人でもあったら、それでそのケースワーカーの仕事は成功したんだ、ということでした。

わたしは、もう、岩村先生の話にすごく感動して、「本当だなー、一人の魂を大切にして、その人に関わっていくことが、本当の意味での伝道ではないか」と思い、ネパールとは場所は違っても、神さまの道具として、釜ケ崎へ行きたいと思ったんです。

――釜ケ崎へはすんなり入ってくれましたか？

入佐　釜ケ崎へはじめて来たとき、朝から酒のにおいがプンプンし、人々が道端にごろごろしていて、すごいショックを受けました。男ばかりの忘れられた地――。日本にこういう所があったのか、と驚きました。しかも、病気の人が多く、医療を必要としている地だとわかりました。それで、もし、神のみこころであれば、ここで働きたいと思いました。

そのころ、わたしは、姫路市のある精神科病院で働いていました。それで、わたしが釜ケ崎へ行きたい、といったら囲りからは反対の声が多くありました。これは偏見から来ていると思いますが、「あんたみたいな女の子が釜ケ崎へ行って何が出来る。かえってずたずたにされる」とか、「ヌカに釘の仕事やでー」といわれました。また、「クリスチャンの伝道は魂の獲得が大切で、その為には、釜ケ崎より今のところにいて、社会的地位ができる方がよい」ということもいわれました。そのような反対があったから、わたしは、ますます釜ケ崎へ行きたいと思うようになったんです。それに、わたしも釜ケ崎の人たちもみな、根本的においては神さまに創られた者であって、自分も環境がそうであれば、その人たちと同じになる可能性があるんです。わたしは、聖書のいう「貧しい」を「必要とする」と思っています。医療を必要とする人たちに関わっていくことが、みことばに従って行く生き方と思います。

昨年三月から十二月まで準備の時を持ちました。その中で、月に二回釜ケ崎へ来て、自分に何が出来るか、本当にやっていけるのか、喫茶店で労働者の言葉に耳を傾けたり、いろいろなことを経験しました。そして、やっぱり来たいとの気持が強くなったのです。

――なるほど。周囲の一つ一つの反対の声を越えて、今年の一月十六日から釜ケ崎へ来られたんですね。それで、釜ケ崎に来られて実際、どんな仕事をされておられますか。

釜ケ崎医療の問題

入佐　午前中は「社会医療センター」で、労働者を正しく理解するための勉強をさせてもらっています。現在は、結核の百症例の調査をしています。これは、今後の自分の仕事に役立つ資料づくりです。

――短期間で、これは無理な願いとは思いますが、医療センターから見た釜ケ崎の医療の問題点は何ですか？

入佐　医療センターには一日平均二百二十人の外来患者があって、結核、肝障害、外傷患者が多いですね。それに六十数人が入院をしていて、医療センターは釜ケ崎医療の中心を担っているのは確かですね。そこで、入院している人は、医師の治療と三食の食事が受けられて、精神的にはともかく、表面上は一応安定しています。外来の人は三日に一日しか働けない人や、働らかないと食べられないので、釜ケ崎の人は病気になったら大変だと思います。一応、病院へ来られる人や自分で治療に来られる人は、まだいい方だと思います。釜ケ崎には、それ以前の問題いっぱいあります。入院するか、外来の瀬戸際にある人の問題。酒を飲んで、治療を受けられない人など。医療センターの医師、相談室の判断一つが労働者の生活を大きく左右します。ただ、医療センターは、この地域にマッチしていない面もあります。この地域の最も大きな問題であるアルコールと結核は、市立更生相談所まかせでしょう。たとえ、結核予防法第35条でその人が排菌していても、フォローができていないのです。

――入佐さんは先ほど、「医療を必要としている人のために働く」といわれましたが、これまでの経験からその内容をもっと具体的に話してくださいませんか。

入佐　大まかに言って、午後からは三角公園へ行ったり、道路で出合った人と話したり青カンしている人のところへ行ったら、それはもう、みんなが病気をもっているんです。そして放置されているんです。話してみると、「そんな病院があるとは知らんかった」とか、知っていても「酒のにおいがしたらあかんやろ」といった言葉がかえってくるんです。ほとんどの人が、肉体的にはもちろん、精神的な悩みや心の傷について話し合ったときもあります。わたしなりに思いますのは、釜ケ崎では精神的にも治療を必要としているということです。患者さんは「ここまで来てしもうたから、もうどうでもええ」とか、「あんな堅くるしい病院よりこゝで死んだ方がよい」など自暴自棄になっているんです。それで、何よりも大切なことは、患者さん自身も自分で治そうとする自立の道を歩むことだと思っています。

――今、「自立の道」といわれたが、その内容と今後の進め方をどのように考えていますか？

於　三角公園で

入佐　わたしのいう「自立」とは、病気だったら自分で病院へ行く、病気にならないように健康管理に気をつけるということです。今、一人の結核患者の人と関わりをもっています。彼は結核なのに飯場へ行き、三角公園で青カンすることを繰り返していました。わたしが三角公園で会ったとき、吐血していました。市更相が受けつけないということでした。それで、救急車を呼んで大和中央病院へ行ったら、「こんな結核はようみんから保健所へ行け」といわれ、彼は間違って玉出社会保険事務所へ行ったらしいんです。それで怒って、また青カン。そんなことが一ヵ月も続いて、わたしが市更相へ行ったら、「大和中央病院からレントゲン写真を借りて来い」といわれ、患者と二人で西成保健所分室へ行ったら、ちょうど羽曳野病院から来ている知っている先生に「どうしてこんなになるまで放って置いたんだ」といわれ、市更相の担当には「あいつは五～六回の入退院歴があって難しい。あんたが、アフターケアーをしなさい」とさんざん言われて、入院することになったんです。今、週に一回病院訪問を続けています。

入院するまで一ヵ月間、気持でぶつかるより仕方がなかったんです。でも、今は昔からの関係のように接することが出来るようになっています。ところが、わたしが知らない間に彼は自己外出をして来て、三日間三角公園で青カンしたんです。そして、わたしに心から「あやまり」今度はがんばるといわれるんです。わたしは、その人をありのまゝに受け入れ、その人の不満を吐き出させて、そこから信頼関係が生まれると思うんです。「あの姉ちゃんが俺のことを気にしている」。それだけでもいい。その積み重ねをしていくことが私の仕事だと思っています。

だんだん顔が知られて、がんばるように側面から援助していくと共に、病気になる前に予防的な健康管理の面も考えていきたいと思っています。それには、どうしても労働者同志が理解し合っていくことです。

具体的には、キリスト教釜ケ崎医療連絡会のメンバーと共に病院訪問をし、病室同志の関係を深めると共に、三ヵ月に一回ぐらい交流会をもち、自分を必要とする人があることを知っていただきたい。もう一つは釜ケ崎地域問題研究会のみなさんと共に「労働者学校」を開き、労働者同志で病気になる前のことを考えていきたいと思っています。

わたしの仕事は、本当に小さいことに目を向けていくことだと思っています。

――最後に、この「報者書」を読んでくださる人に訴えたいことがありますか？

入佐　キリスト教であっても、釜ケ崎に対して偏見があると思います。一度足を運んでカンパをしたら、お金のもつ意味も深くなるのではないですか。「報告書」で字を読んでも片寄ってしまいます。

自立への道

病院訪問―わたくしのテーマ

わたくしのテーマは何んでしたか。病院訪問について？　イヤ、「それにあなたの感想」と言われたでしょう。「感想」は特に強く聞こえました。なぜでしょうか？　病院訪問についてはわたくしの感想は特に弱いだからでしょう。

訪問についての感想？　必要です。病院訪問は必要です。どうしても必要ですというのが先ず一つの感想です。わたくしは何もできませんというのが、またもう一つべつな感想。この二つのわたくしの感想の間でわたくしが時々訪問しますし、時々避ける。どっちの道も気分が悪い。

フム、わたくし自身も、自分自身を慰めるためにこの訪問のプロセスを思い出します。

ある時に、ある病院のある患者さんがこう言われました。「キリスト教釜ケ崎医療班の人が見舞に来ました時から病院の人たち（お医者さんや看護婦さん）、ぼくにたいして態度がかわってきました。よりよくなりました。人間らしくなりました。その時までは物のように扱われましたが」。もしかすると、この患者さん自身がその時までは「物」のような気持しかなかったのかも知れません。とにかく、訪問してから何かがかわってきました。

ある病院の全体のことは悪いです。建物は古いし、お医者さんは何週間のしかし、やります。一ケ月一回、二軒か三軒。二人の患者。一間の部屋。または病院によって部屋までも入らして下さらないので玄関だけで五人や二人や十人と、坐ったまま、立ったまま、顔も知らないし、お名前も覚えていないのに、訪問したこともあります。

これは「訪問」でしょうか？　しかし、必要ですから、また行きます。いくらやり方は下手だと思っても、やったことが足らないとわかっても、また行きます。必要だから。

しかし、こういう「足らない」との感想があるのにもかかわらず病院訪問するのは、ただ「必要」だからです。その必要さはいったいどこに、どうしてありますかと……

間に一回も来られないし、看護婦さんはパートが多いのです。あまり責任を持っていないし、などのことがいろいろあります。この病院の患者さんが自分自身が立ち上がって、病院の中で病院に対して人間の人権、患者の人権を守るようにたのみました。それでその病院はその七人の結核の患者さんを追い出しました。追い出された患者さんたちがキリスト教釜ケ崎医療班に連絡がありましたので、仏教や市民と共に次のステップができました。しかし、追い出した病院に対してはわれわれは何もできません。税金のためにはこの病院は最近、何回か新聞にのったことがあります。けれども人権を害うならば、だれも何も言うことができなくなります。この日本はいったい何の国でしょうか。そういうことも訪問しながら感想します。

まだまだいろいろありますが、外の

人もこの問題について書いて下さると思いますのでわたくしは一応ここまで。気絶、無力、何にもできないわれわれは病院訪問します。必要だから！

患者さんのために必要ですし、病院のためにも必要です。又はわれわれのためにも必要です。患者さんと共になります。患者さんの気持ちよりよくわかるようになりますし、又はよりよい人間関係になります。

それから、あなたのためにもわれわれの訪問やそれについての感想や、この文章が必要ですとわたくしが思います。われわれの活動とわれわれの文章がなければ、ある病院のガードマンが患者さんを鉄の鎖でベッドに繋ぐことを知られないでしょう。知ってほしいです。そうすると「釜ケ崎はたいへんですね」という挨拶は、もう少し心の助け合いになるかも知れません。よろしく。

E・ストローム

病院訪問―大和中央病院

夜の三角公園。十分間隔の南海線の音。道往く人の声。ゲタをひきずって歩いている。物をける音、又時には激しい喧嘩。様々な騒音の中でみな生きている。今夜も多くの労働者が一日の疲れのため、又は働くことが出来なかったままに寒空の下で細々とでもいい、暖をとりたい。十分間と燃え続けることのない木切や紙くず又、ゴミなんでも燃してみるがあまりにもわずかな燃料。それもなくなって足もとに二つ三つころがっている一カップの空ビン。そして泥酔のまま大地に身をまかしている。幾人かのパトロールの人々と声をかける。「布団のある所へ行こう」「このままでは死んでしまう」。しかたなく二、三人でかかえながらリヤカーにのせて医療センターの屋根の下に、せめてこれだけでもしなければならない。そうです私たちに出来るのはこれだけ、しかも一人では何も出来ないのです。多くの人々の心と力を合せて。又医療の助けを急ぐ時、救急車の援助を求めるのです。こうして越冬期間内に入院を依頼した方々のお見舞が始まったのです。指定救急病院の一つ大和中央病院に何人ぐらい入院したでしょう。そしてその後の様子は残念なことに面会は病室に訪問すること、個々を尋ねることは許されません。このような制限のため充分知ることは出来ないのです。ある医師からこんなことを言われました。「お前たちは何故見舞に来るのか。病人は医者にまかしておけ」と。確かにそうです。しかしこんなに割切ることが出来ますか。来る日も来る日もベッドの上で苦しみと不安をじっと耐えておられる方の側でわずかでも苦しみを共にすることが出来れば、又何か別の面で手伝うことがあれば、苦しみは少し軽くなるんじゃないでしょうか。そんな思いで訪問させて頂きたいのです。今はかなりお元気な方々が階段を降りて事務所の前のベンチに腰をかけて私の訪問をうけて下さって

います。一日も早く快復し社会復帰の出来ることを祈りながら。

シスター・岡風呂

夜間パトロール

「ねえ詫摩さん今日〇〇へ行かない？」「うーん残念だけど行くところがあるの」「どこ？」「いいところ」「どこどこ？」「かまがさき」「え、どうしてそんなところへ行くの？」そんなところと人は言う。行ってみもしないでこわいきたないところだと勝手に決めてしまっている。「そんなことないわよ、一度私と一緒に行ってみない？」「いいえ結構」と相手は身ぶるいせんばかりに言う。ところが私にとって釜ケ崎とはきれいとは云えないまでも少くともこわいところではないのである。むしろ親しみのあるなつかしい気持ちすら湧くところなのである。何故？と問うてみる。夜間パトロールでお馴染みになったバタヤの小父さん、始めのうちは寝入りばなにおこしたとおこった人が終りごろになると、御苦労さんと云っておかきを差入れしてくれそれをポリポリとたべながら（まことに不謹慎で申し訳ない）夜道を歩く気楽さ、救急車で入った病院のことを、これからも行くであろう人達のためにもっと何とかならぬものか（病院の患者に対する態度、診療の在り方等を）と真剣に訴える人、私の態度にお座なりなところがあったのか、何度会ってもそっぽを向く人、たとえぼろを身にまとい、駅をねぐらにしているにもかかわらず、思わず頭を下げたくなるような他の人々へのおもんばかりに満ちた考えをもって生活している人。その人と言葉を交す度に私は多くのことを教えられ美しい心のあることを知って感動する。またお酒に酔った人からからまれ、しらふの人からからまれてその人達の淋しさを思い、この人達と親しくなるには月水金の夜だけでは足りないわと思ったりもする。そして思いがけない時に病気で工合の悪かった人が元気になって働いている姿に接し、（明るい話があまりないので）すっかりうれしくなってしまう。またある時はちょっとこわいようなお兄さんだなと思っている人から「ハイこれみんなでたべ」とおみかんの袋入りをもらって人をみた目だけで判断してはいけないわとチョッピリ反省したり、と云った工合に単細胞の私はすぐ喜んだり悲しんだり憤ったりの三ケ月だった。ひるがえっていつもパトロールで一緒だった方達について、釜日労の方々は単に夜のパトロールだけでなく、炊き出し、毎日のおふとんのあげおろし、弱い人達に対して言葉はあらくても思いやりに満ちた態度「強いことはやさしいことだ」と云う言葉の通りをみせていただいた。KCCの方々、日本に於けるむつかしい立場と心ない人々による御不快なことも多々あろうかと思われるのに、いつも誇りある毅然たる態度でおられひそかに畏敬の念を抱く。学生さんを含めて地域研の若い方々、当世の若い人達に言われている三無主義とはおよそ縁のない真摯な人々。自らも車椅子に乗ってよく一緒にまわっ

た和子さん、びっくりする程大きな声の出るフサ子さん、共に私にとって愛すべき愛らしい女性である。また我が身も弱い立場にあって更に弱い仲間のためにパトロールに参加する暁光会の人々、自身をその地の中に置いて三百六十五日不断の努力をなさっておられる教会の先生方、神父さん、シスター達、真冬のアオカンはどんなに寒かろうと医療センターの軒下で体験宿泊をした谷満さん、病める人々のために釜ケ崎に移り住んで活動を開始された入佐さん、一年の半分を専従者として過ごす福田さん等。私にとって限りなく有難い人達ばかりである。おそらくほんの表面だけしかみきれない私ではあるが、あえて云うならば釜ケ崎は人生の学び舎である。そして再び問う。

「何故に釜ケ崎を愛するや？」と、答は「彼の地こそ本当の、裸の人間のいるところだから」

詫摩　良

釜ケ崎の中高年問題

肺結核を病む釜ケ崎の労働者の入院先を訪問して、これは容易ならざる事態だということを私は痛烈に認識させられている。

私の会った患者さんは五十才、六十才台ばかりで、只一人だけTさんは三十才前後とみえた。この人は、初対面の時は二日前に釜から救急車でこられたということで、衰弱しきっておられ寝台の上であえぐように横たわっておられた。それでも重野先生と私が寝台に近よると、ガーゼマスクを顔にあてる。そんなことしなくてもよいのですよと重野先生がいう。Tさんのその仕種は痛々しくかなしかった。

Oさんは六十四才、結核性肋膜炎で入院されてから約七ケ月。話をきいていると印刷工としての腕の立った労働者であったことが話の端々にうかがえるのである。早く退院して働きたい。どんなことをしてでも自分の手と体で生活の道をたてたい。この七月には退院して自活したい。それのみが先に立つ話しぶりである。その第一歩をどういう方法でふみ出すのかという段になると、話の中味は俄かに具体性が稀薄になってしまい、どこかでアンコをしてでもという希望になってしまう。

中高年問題が世論を賑している。「みんなの老後」と題して朝日新聞は特集記事を数年連載している。みんなの老後、私はみんなという言葉にいまひっかゝっている。釜ケ崎の労働者達にもみんな老後がひかえている。この人達の老後に一体何が約束されているというのか。

田中　豊